


クラス	102	担当教員	小 倉 美 津 夫
	テーマ	外国語としての英語教育とその問題点	
	著書・論文 研究課題等	著書・論文:「グラフで見るアメリカ社会の現実」(学文社)、「表現力を伸ばす英語の指導—Aural-Oral Practice によって」、「英語 I の効果的指導法—4 技能のバランスのとれた教科指導」、「自己表現力を高める英語学習指導法改善に関する研究」、「アメリカにおける School Discipline の研究」等 研究課題:英語教育指導法改善に関する研究、コミュニケーション活動を重視した英語教育指導法、英語教員の成長を促す支援のあり方に関する研究	

ゼミナール概要

キーワード：教育、自己教育力、英語力、外国語学習法、英語教育指導法、達成感、満足感、つまずき

目的、内容、方法等：

日本の英語教育史において劇的な変化は、小学校における外国語（英語）活動が導入されたことである。小学校 5 年生・6 年生が週 1 時間外国語（英語）活動を通してコミュニケーション的な英語の素地を養っている。そして、すでに各クラスに 7 人以上の児童が英語嫌いになっていると報告されている。ベネッセ教育開発センター「第 1 回 中学校英語に関する基本調査（生徒調査）」(2009)によれば、「中学校に入学する前、英語は好きでしたか」という問いに対して「嫌い／どちらかといえば嫌い」が 43%に達している。さらに、「中学校に入学する前、中学校で英語を学ぶことが楽しみでしたか」に対しては、「（あまり／まったく）楽しみでなかった」が 53%に達し、「（とても／まあ）楽しみだった」の 42%を大きく上回っている。小学校段階での外国語活動が英語ぎらいを増やしていることが大きな原因であると推測される。日本児童英語教育学会関西支部の調査報告（『英語教育』2008 年 10 月増刊号）に次のようなことが載っていた。小学校時代に英語を教科として長時間学習した児童と、あまり学ばなかった児童の中学 3 年間の英語力の伸びを比べると、リスニング、会話、読解、英語学習やコミュニケーションに対する態度のすべての領域で、小学校で英語を長時間学習した子どもの方が英語のスコアを下げている。つまり、小学校で英語をたくさん勉強した子どもの多くが、中学校に入ると伸びなくなったのである。小学校段階で英語への興味が薄れ、中学校の授業に新鮮味を感じられなくなったことが主な原因だと考えられる。

中学校では、英語が嫌いになったのは 1 年生の後半が最も多く、次いで 2 年生の前半であると報告されている。児童・生徒たちはどこでつまずき、教師たちはその生徒たちのつまずきにどう対処しているのか、また、どう対処すべきなのかを文献やフィールド調査を通して過去の事例や現在の実態を探り、今後の英語教育の望ましい形を追究する。もちろん、英語によるコミュニケーションを支える文法についても学習を進めながら、文法力の向上と総合的な英語力を高めることも視野においている。

授業計画（スケジュール）：

- ・ 文献学習・フィールド調査等、グループ討議や発表を通して、学習を進める。
- ・ テーマ設定:基本的には個人ごとに設定しますが、共同研究でも構いません。
- ・ ゼミでは、学生による問題提起とディスカッションの機会を多く持ちます。
- ・ 場合によっては、ゼミ生全体でひとつのテーマについて研究することもあり得ます。

テキストは適宜紹介します。

担当教員からのメッセージ

英語教員を志望する人や英語教育・英語学習に関心のある人たちの協働学習と研究の機会です。集まれ、地道に、着実に勉強を継続できる学生のみなさん！